

A graphic featuring a large, stylized key shape. Inside the top part of the key, the words "Key Question" are written in a bold, sans-serif font. Below this, the number "8" is written in a very large, bold, black font, partially overlapping the key's shaft.

Key Question 8

質的記述的研究とはどういうもの？

日本の主要な看護系学会誌に報告されている質的研究論文に、いくつかか目を通してみてください。その多くが質的記述的研究であることに気づくことでしょう。学位論文においても例外ではありません。質的研究に取り組んだ大学院生が採用する研究デザインのほとんどは、質的記述的研究です。

このように日本の看護学界では質的記述的研究は数多く取り組まれています。なぜ質的記述的研究なのかと問われると、多くの方が答えに窮するのではないかと思います。現象学、グラウンデッド・セオリー、エスノグラフィー、ナラティブ研究など、固有の方法論的枠組みをもつ研究については、それらが拠って立つ学問的伝統の理解を促すためのさまざまなテキストブックが巷をにぎわしています。一方、質的記述的研究はどうでしょうか。わずかな例外を除いて、質的記述的研究について解説したテキストブックはほとんど存在しません。

質的記述的研究に対する方法論的な関心の低さは、どこからきて、何をもたらすのでしょうか。この問題を考えるためには、看護科学のパラダイム転換を通じて看護の研究方法がどのように変化してきたのかを追求した野島（2009）の優れた研究が参考になります。野島によると、1980年代前半の米国は、看護科学者たちが30年間量的研究

方法に対して抱き続けてきた信頼が、後戻りしない形で揺らぎ始めた時代でした。しかしながら、若手の看護科学者の間に顕著な「量的研究離れ」の徴候が見られ、質的研究方法への関心が高まったこの時代にあっても、新しい世代は、未だ量的研究方法から完全に「足を洗う」ところへまでは至りませんでした (pp.112-113)。遅れて科学の世界に入ってきて、そこで生き残り、科学者として成長していかなければならなかった看護科学者たちにとって、論理実証主義は「科学」と同義であり、それを採り入れ、同化していくだけの強い誘引力と価値をもっていたであろうと野島は考察します (p.104)。

こうした情勢でもなお質的なアプローチの強みを理解してもらうには、その方法論的な厳密性を世に訴える必要があるでしょう。より体系化されて緻密な、あるいは知的に洗練された深みのある、固有の方法論的枠組みをもつ「厳密な」研究に、質的アプローチに共感する人々が飛びついたとしても不思議ではありません。そしてその結果、質的記述的研究は、より「厳密な」研究に比べて稚拙で二流の、あるいは初心者向けの方法として位置づけられ、特別な関心を寄せられることなく今日までできてしまったとは考えられないでしょうか。

現在では質的研究に対する理解はかなり進みましたが、その理解は、データの収集と解釈に複雑な手続きを必要とする方法論に対して向けられており、一方では、より多く実施されている質的記述的研究に対する理解が思ったほど進んでいないのは、皮肉なことと言えます。

今こそ質的記述的研究について理解を深めるときではないでしょうか。10数年前からこの問題に熱心に取り組んでおられるサンデロウスキー先生のお話を聞いてみましょう。

文献

野島良子 (2009)。看護科学のパラダイム転換——質的研究はいつ、なぜ登場したのか？。へるす出版。

Key Question への

回答

8

質的記述的研究は、現象の率直な記述が必要なときに選択すべき研究デザインです

質的記述はどうなったのか？⁸⁾

今や質的研究者は、研究法について言えば、理論的にも技術的にも洗練されたさまざまな方法から選ぶことができ、しかも、その数は増え続けている。したがって、よりシンプルな、そして、かなり「魅力的でない」*方法、すなわち、質的記述の方法を復活させようとするのはおかしく見えるかもしれない。しかし、この質的記述の方法の再評価が求められているのは、質的研究の方法がさらに複雑さを増していることと、看護研究においては研究法が圧倒的に重要であるという、まさにそのことなのである。

記述的研究は、研究法の教科書では、量的研究デザインの序例の中で最も低い位置に置かれて説明されているのが普通である。この序列では、予測と制御を意図した「厳密な」実験研究が最上位であり、その他の研究法はどのようなものであれ「非」実験系であり、その位置は低い（例えば、Talbot, 1995）。量的研究において、記述的手法は「最も粗雑な、洗練されていない研究法」（Thorne, Kirkham, & MacDonald-Emes, 1997, p.170）と見なされてきたが、この見方は質的研究に従事する研究者にマイナスの影響を与えてきており、その多くは自分たちの取り組みは単なる記述以上のものであると反論せざるを得なかった。つまり、質的研究者は自らの仕事を、現象学、グラウンデッド・セオリー、エスノグラフィ、あるいはナラティブ研究と呼ぶことで、「学問的な信頼性」(p.170)を得ようとしてきた。

しかしながらこういった努力は、実際に、現象学的研究、グラウンデッド・セオリー法、エスノグラフィックな研究、ナラティブ研究を行なっているというよりは、あまりにも多くのケースで、現象学、グラウンデッド・セオ

8) Sandelowski, M. (2000). Whatever happened to qualitative description?. *Research in Nursing & Health*, 23, 334-340. (© 2000 John Wiley & Sons, Inc.)

* この「魅力的ではない (less sexy)」という表現は Joan Lynaugh のものである。これは、重要ではあるが、それに見合った注目を受けていないという意味で使われている。

リー、エスノグラフィー、ナラティブを「装っている」(Wolcott, 1992) だけの結果となった。確かに、状況は混乱しており、そのために、ごくわずかしか構造化されていない開放型のインタビューしか行なわない研究でもナラティブと呼び、研究参加者の「主観的な」経験の報告に過ぎないものでも現象学的と呼び、さらに、異なるエスニック集団の研究参加者しか含まないにもかかわらずエスノグラフィックと呼んでいる。もちろん、こういったものでも実践に役立つ情報をもたらす価値のある研究であるのは間違いないだろう。しかし、このような、いわゆるナラティブ研究、現象学的研究、そしてエスノグラフィックな研究と呼ばれるものは、たとえ、そこにナラティブ的、現象学的、エスノグラフィックな含みがあったとしても、質的記述的研究と言い表わしたほうがよい場合が多い。質的研究における、この「含み」の問題については、後で扱うことにする。

実践を伴う学問領域において、質的記述の方法は最もよく用いられる方法論のアプローチの1つだが、膨大な量の質的方法に関する文献の中では、質的記述的方法を他の質的方法と同等の位置にある独自性をもつ1つの方法として包括的に記述しているものは見当たらない。したがって本稿では、質的記述を、研究者が方法論的な離れ業に訴えることなく、臆さずに主張することのできる方法ととらえておく。

質的記述を私が取り上げるのは、一部には、「解釈的記述 (interpretive description)」についての Thorne, Kirkham, MacDonald-Emes (1997) の洞察に満ちた議論に触発されてのことである。しかし私の発表は、その考察や、それに関連して以前に Thorne (1991) が行なった「方法論的正統性」についての議論とは次の3つの点で異なる。第1に、私は質的記述を、「非定言的な選択」とは対照的な、探求のための定言的な選択だと見なしている。つまり、グラウンデッド・セオリー、現象学、エスノグラフィーが、新たに、看護研究に特化して用いられるのとは対照的に、質的記述的研究法は既に存在しているのだが、それほど知られていない。第2に、質的記述的研究では、「解釈的記述」ほどには、データから離れたり、あるいはデータの中に入ることが求められていないという点で、質的記述は解釈的記述に比べて解釈的でないと見ている。第3に、質的記述的研究は、データの概念的解釈、もしくは他の高度に抽象的な解釈を必要としないという点である。質的記述についての私の説明は、

Artinian (1988) による質的研究の「記述様式」という有益な考察とは異なっている。それは、私が質的記述的研究の記述様式を、他の質的研究への「入り口」(p.139) —— Artinian によればグラウンデッド・セオリー研究への必要な導入部 —— というよりは、むしろ、それ自身、完全で価値のある最終的な成果と見なしているからである。

私がここに示す質的記述的方法には「基本的」、「基礎的」という形容詞をつけることで、現象学、グラウンデッド・セオリー、エスノグラフィーなどの、他の質的記述を用いた研究法と区別する。現象学的研究、グラウンデッド・セオリー研究、エスノグラフィックな研究は、記述的領域だけに限定されず、現象の説明にも用いられることもある。残念なことに、「基本的」、「基礎的」、そして「表面的」(surface: この語は後で使用する) などの語には、何か初歩的な、うわべだけの、単純な、もしくは単に予備的などといった意味が暗示される。私は、これらの語を使うことで、1つの方法が他の方法に比べてやさしいだとか、価値がない、望ましくない、あるいは科学的でないなどと言い表わす不当な序列を強めるつもりはない。どのような方法であれ、まったくだめなものなければ、完全なものもない。むしろ、目的に応じて、程度の差はあっても、多かれ少なかれ、役に立ったり、適切であったりするのである。したがって私はここで、質的記述なるものが、それ自身、価値のある方法であると述べておく。質的記述を他の方法と比較するのは、その内容を明らかにして説明するためであって、優劣を示したり、欠点を指摘するためではない。

■ 質的記述 vs. 量的記述, および他の質的方法 ■

研究には必ず記述が伴い、そして記述には必ず解釈が伴う。いかなる現象であれ (あるいは、出来事や経験であれ)、それを知るには、少なくとも、その現象についての「事実」を知ることが求められる。しかし、そうした事実の意味を与えている特定の文脈から離れては、いかなる「事実」も存在しない。記述は常に、記述する人の感じ方、受け取り方、感じやすさ、敏感さに左右されていて (例えば、Emerson, Fretz, & Shaw, 1995; Giorgi, 1992; Wolcott, 1994), 「裸の、無垢な眼で、純粹に見ることなどない」(Pearce, 1971, p.4) のであり、「完全無欠の知覚」(Wolcott による Beer の引用, 1994, p.13) などもない。経験や出来事を記述しようとする研究者は、何を記述するのかを選び、

そのある側面の特徴を描写するプロセスの中で、その経験や出来事の形を変え始めるのである。

いかなる記述も解釈から自由ではあり得ないが、基本的・基礎的な質的記述には、例えば、現象学的記述やグラウンデッド・セオリー的記述とは対照的に、推論の少ない解釈、つまり、他の研究者とコンセンサスがより簡単に得られるような解釈が必然的に含まれている。1人の女性にインタビューを行なったとしよう。ある研究者は、その女性がインタビューの中で語った感情に焦点を当て、別の研究者はその出来事に注目したとしても、2人の研究者とも次の点に同意するであろう。例えば、その女性が怒っていると何度も述べたことや、母親が乳がんであると知ったその翌日に彼女が亡くなったと語ったことなどである。そして、見た目には同じ状況を記述している2人の研究者でも、1人は部屋の空間的な配置の特徴を述べ、もう1人は社会的相互作用を取り上げるかもしれない。

2人とも焦点の当てどころは異なっても、それぞれの記述がその状況を正確に表現したものであることは認めるべきである。つまり、推論の少ない記述に対して研究者は、それぞれの記述の中で異なる事実を取り上げるとしても、そのケースの「事実」については躊躇せずに同意するであろう。記述には、それがインタビューであれ観察データであれ、記述的要約という形をとるなら、何を記述すべきかについて研究者の選択が必然的に伴ってくる。しかしこれらの記述には、出来事をその適切な順序で常に正確に伝えるという記述的妥当性がなくてはならないし、また、研究参加者がその出来事に結び付ける意味を正確に伝えるという解釈的妥当性がなければならない(Maxwell, 1992)。「そこにある」ものすべてを記述することはできないし、またそうするつもりもないだろうが、記述するために選ばれるものは、たいていの観察者が実際に「そこにある」と認めるものであろう。

したがって質的記述は、基本的に「(人の) 知覚作用を通してフィルターがかけられる」(Wolcott, 1994, p.13) という点において解釈的であることは避けられない。しかしそれは、研究者が、概念的、哲学的、あるいはその他の高度に抽象的な枠組みやシステムの観点から出来事を記述しようと意図的に選び出すという意味において、きわめて解釈的だということはない。質的記述的研究の記述では、ケースの事実を日常の言葉で表現するが、これとは対照的に、現

象学、グラウンデッド・セオリー、エスノグラフィー、もしくは、ナラティブによる記述では、出来事を別の言葉で再現する。つまり研究者は、自分が見たり聞いたりすることを、自分なりに解釈して表現を大幅に変えていかなければならない。

言葉の表現を変えていく方法は、一部には、これらの方法論そのものから生じる。例えば、グラウンデッド・セオリー研究の傾向として、研究者は「条件/帰結マトリックス (conditional/consequential matrix)」の中で要素を探し、データをその要素として解釈する (Strauss & Corbin, 1998, p.181)。現象学的研究の中には、身体性や時間性といった「生活世界の実存 (lifeworld existentials)」を探し、それに関連させてデータを解釈させるものがある (Van Manen, 1990, p.101)。このような記述においては、言葉や情景を読むだけでなく、むしろ、いろいろな角度からそこにあるものを読みとっていくことが要求されることから、研究者はデータの中に深く入り込んだり、あるいはそれを超えて考えなければならない (例えば、McMahon, 1996; Poirier & Ayres, 1997)。Wertz (1983) による、現象学的な「時」の分析の研究は、ある出来事についての研究参加者の記述から、その出来事についての研究者による現象学的記述に至る一連の変化を説明した優れた研究である。

基本的な質的記述は、現象学的記述やグラウンデッド・セオリーの記述ほどではないにせよ、量的記述よりは解釈的である。量的記述には、あらかじめ選択された変数に共通するデータセットを得るための調査や、その他のあらかじめ構造化された方法、そして、それをまとめるための記述統計が必要とされる。研究者が、研究する変数をあらかじめ選択することで、研究に予期される範囲を設定するという点において、また、統計的検定の結果から結論を引き出すという点において、それ自身、一連の仮定に基づいているということからも、量的記述研究には解釈が含まれている。しかし、この量的記述研究における解釈は、あらかじめ設定された範囲を超えることのない解釈であり、そこには、概念の操作的定義や、それを調査やその他の手法の項目目として表わすことが含まれている。量的記述では、研究参加者が出来事に与える意味について知り得る内容が制限され、さらに、研究者は予期し得ないことを考える余地がほとんどない (Becker, 1996, p.61)。

質的研究を行なっている研究者は、ある出来事を構成するすべての要素を

入手できるデータを可能な限り多く集めたいと考えている。「フィールドの中に」いる限り、質的研究者たちはフィールドの中で観察できるものは何であれデータだと考えざるを得ない。質的研究者は、量的研究者のように簡単には「データから離れる」(Becker, 1996, p.56) ことはできない。「完全な記述は人を惑わすもの」であっても、質的記述の「より完全な」記述は、量的調査に起因する。制限のある、つまり「乏しい」(質的研究者にはこのように感じられることが多いようだが) 記述よりも、質的研究者にとっては望ましいものである(p.64)。最後に、量的研究では、質的記述的研究に比べて、調査(何があるのかを見出す)と記述(見出されたものを説明する)の間にはより明らかな区別が存在する。

まとめると、質的記述的研究とは、ある出来事について、そうした出来事が起きている日常の言葉で包括的にまとめるものである。このような研究を行なう研究者は、記述的妥当性と解釈的妥当性を求めようとする。記述的妥当性とは、同じ出来事を観察したほとんどの人(研究者、研究参加者を含む)が間違いないと認める。出来事の正確な説明のことであり、解釈的妥当性とは、研究参加者が間違いないと認める出来事に、その研究参加者が与えた意味の正確な説明のことであり(Maxwell, 1992)。質的記述的研究を行なう研究者は、グラウンデッド・セオリー、現象学、エスノグラフィー、ナラティブ研究をする研究者よりも、データのより近くにおいて、語られた言葉や出来事の表面から離れない。質的記述的研究においては、言葉はコミュニケーションの手段であり、記述するためだけに用いられるものであって、それ自体読み取られなければならない解釈的な構造ではない。しかしそのような表面的な読みは、うわべだけで中身がないもの、つまり取るに足りない価値のないものだと見なされるものではない。私は、ここで「表面」という語で、報告された出来事や観察された出来事への洞察の深みや、そしてその出来事についての解釈の度合いを伝えようとしている。事実や、その事実に研究参加者が与える意味を正しくとらえ、それを明解でわかりやすく有益な方法で伝えることは、意味のないことでもなければ、簡単なことでもない。

■ 質的記述的研究デザインの特徴 ■

質的記述のデザインは、サンプリングの手法、および、データの収集、分

析、再現の手法を組み合わせたものである。その組み合わせは、概して折衷的であるが、合理的で、十分に練られたものである。以下のセクションでは、質的記述的研究デザインの典型的な特徴について説明する。質的記述は臨床看護師や政策立案者に特に関連する疑問に、率直で、ほとんど飾らない（つまり、理論化、もしくは、変形やひねりが最小限の）解答を得るのにとりわけ適している。質的記述的研究が取り組むのに適した問いには次のようなものがある。ある出来事について、人々はどんな関心を抱いているか。ある出来事に対して、人々はどのような反応（例えば、考え、感情、態度）をするのか。あるサービスや手続きを使うか、使わないかには、どのような理由があるのか。あるサービスを誰が、そして、いつ利用するのか。ある出来事からの回復を促進したり、妨げたりする要因は何かなどである。

理論的/哲学的志向

質的記述的研究は、研究者が既存の理論から最も自由であるという点において、一連の質的アプローチの中では最も「理論的」でないことはほぼ間違いない。現象学、グラウンデッド・セオリー、エスノグラフィ、ナラティブ研究は、それぞれの学問的伝統から生じた固有の方法論的枠組みに基礎づけられている一方（例えば、Lowenberg, 1993）、質的記述的研究はこれらの手法とは対照的に、自然主義的探究の一般的な教えに基づいている。自然主義的探究は、探究へのすべての要素に関わる全体的な志向であり、質的研究のみならず、動物行動学的観察のような、人間と動物の行動の研究も含んでいる。自然主義的探究は、研究における可能な範囲で、あるものをその自然の状態、つまりそのままの状態の研究することへの関与のみを意味している（Lincoln & Guba, 1985; Willems, 1967）。よって、いかなる自然主義的研究においても、検討すべき変数の事前選択、変数の操作、対象とする現象の理論的な見方への推論的な関与などは存在しない。したがって自然主義的探究では、対象となる現象を、それが研究対象でないかのような、そのままの状態で提示することが可能な手法が用いられる。

色合い、音色、質感 質的記述的研究は、現象学的研究、グラウンデッド・セオリー研究、エスノグラフィックな研究、ナラティブ研究などとは異なっている。しかし、それでもなお、質的記述的研究には、これらのアプロー

チの色合い (hue)、音色 (tone)、質感 (texture) があるようだ。どの質的なアプローチひとつを取ってみても、他の質的なアプローチの見た目、音色、そして感触を受け取ることができる。そこで、自らの研究を現象学的特色のあるグラウンデッド・セオリー研究であると評したものや (Charmaz, 1990)、現象学的、ナラティブの色合いが感じられるグラウンデッド・セオリー研究だと述べたものもある (Sandelowski, Holditch-Davis, Harris, 1992)。確かに、質的研究は、ある1つの方法を「純粹」に使用することからではなく、さまざまな色合いをもつ、見た目の違う方法を用いることからつくり出されるので、グラウンデッド・セオリーの含みのあるエスノグラフィックな研究もあれば (例えば、Timmermans, 1997)、エスノグラフィックの含みのあるグラウンデッド・セオリー研究もある (例えば、Kittell, Mansfield, & Voda, 1998)。

それゆえ、質的記述的研究に、継続的比較法のような、グラウンデッド・セオリーに関連する技法を1つ以上用いることで、対象とする現象のグラウンデッド・セオリーの解釈を生み出さなくとも、その研究にはグラウンデッド・セオリーの含みが感じられることがあろう (例えば、Chow, 1998)。また、質的記述的研究の中には、研究者がある語やフレーズ、もしくはある経験の瞬間に注目することで、対象とする現象についてナラティブの解釈、現象学的解釈を生み出さなくとも、ナラティブ的、もしくは現象学的色合いを感じるものがある (例えば、Jablonski, 1994)。あるエスノグラフィックな内容分析の記述は (Altheide, 1987)、質的内容分析 (以下で考察する) を、エスノグラフィック、かつグラウンデッド・セオリー的な含みをもつ手法として示している。また、質的記述的研究には、フェミニズムのような、より大きなパラダイムからも微妙な影が落ちていることもある。

さまざまな色合い、音色、質感をもつ研究を、方法や手法の誤った言及や、誤った用いられ方と混同してはならない。研究の発表について、自分が用いた手法を適切に示さなくとも、あるいはまったく言及していなくとも、研究者は、理論的サンプリング、継続的比較、ナラティブ分析、そして現象学的省察を用いたと主張することができる。また研究者が、ミックスド・メソッドによる研究のように、複数の手法をはっきりと組み合わせて用いることもあろう (Tashakkori & Teddlie, 1998)。

サンプリング

Patton (1990) が述べた、意図的なサンプリング手法のほぼ全部が、質的記述的研究において用いられているようだ。とりわけ役に立つのが、多様性が最大になるサンプリングである。それは、広範囲にわたる現象的、人口統計学的に多様なケースを横断して、対象となる現象によく見られる固有の徴候を研究することが可能になるからである (Sandelowski, 1995; cf. Key Question 3)。研究者は、あらかじめ選択された変数の組み合わせを示すために、ケースのサンプリングを選択するか (Trost, 1986)、もしくは、ある現象をそれが現われるように記述するためにその現象の典型的なケースをサンプリングするか、あるいは、現象が普通とは違って現われるのを記述するためのその現象の普通でないケースをサンプリングすることもある。どの質的研究にも見られるように、合目的サンプリングの究極的な目的は、研究の目的に合致した情報に富むと考えられるケースを得ることである。研究者がなすべきことは、自らのサンプリング方略が研究の目的に合ったものだと主張することである。

データ収集

質的記述的研究におけるデータ収集は、一般的に、出来事、もしくは経験に関する「誰が」、「何を」、「どこで」について、つまり、その基本的な性質とその状態の発見に向けられる。データの収集方法には、通常、個人とフォーカスグループの両方、もしくはそのどちらかを対象としたインタビューがあり、それは最小から中程度に構造化されている。フォーカスグループは、質的研究では、出来事についての広範囲にわたる情報を入手するために使用されるのが普通なので、量的調査に質的に対応するものと考ええると便利である。データ収集のテクニックには、対象となる出来事の観察や、記録物、および人工物の詳細な確認が含まれる。

データ分析

質的内容分析は、質的記述的研究において選択可能な分析方略である。質的内容分析は、データの情報内容の要約を志向する言語データ、および視覚的データのダイナミックな分析形式である (Altheide, 1987; Morgan, 1993)**。データに一連の既存コードを系統的に当てはめていく量的内容分析とは対照的

に、質的内容分析ではコードがデータから導き出される。つまり質的内容分析では、コードは系統的に適用されるが、そのコードは研究プロセスの中でデータそのものからつくり出される。質的研究の特徴は、一般に、データの収集と分析が同時に行なわれ、それによって、収集と分析が互いに影響し合うことにある。質的内容分析は、新たなデータと、そのデータについての新しい洞察を取り入れるために、研究者がデータ処理を絶えず修正していくことから、それはまた、内省的であり相互作用でもある。質的内容分析のプロセスを既存のコーディングシステムから始める研究者もいるが、このシステムは、データに最も合うように分析過程の中で常に修正されるか、新しいシステムを用いるため完全に破棄されることすらあり得る。こういった分析手法は「はめ込み型分析スタイル (template analysis style)」とも呼ばれる (Miller & Crabtree, 1992, p.18)。

量的研究であれ質的研究であれ、内容分析には、回答と、それぞれの回答のカテゴリーにおける研究参加者の数を数えることが必然的に伴ってくる。しかし質的内容分析では、計数は研究目的を達成するための手段であって、それ自体が目的ではない。ここで、研究者は記述統計学を用いてデータを数値的にまとめることで、「準統計的分析スタイル (quasi-statistical analysis style)」(Miller & Crabtree, 1992, p.18)を用いることになる。しかし計数が最終的に目指すものは、データを準統計的に表現することではなく、数を数えることで見出され確認されるデータのパターンや規則性を記述することにある。

質的内容分析は、明らかになっているデータの数値 (例えば、頻度や平均値) を理解するだけでなく、データのもつ潜在的な内容を理解する努力があるという点で、量的内容分析に比べて、より深く解釈の領域に入り込んでいる。それでも、質的内容分析はインタビューの言葉通りにデータを提示すればよいという点で、質的分析手法の中で最も解釈的側面の少ないアプローチである。

*** より広い、一般的な意味では、テキストの人についての分析はすべて、内容の分析を必要とする。したがって、継続的比較分析、現象学的分析、およびさまざまな統計的分析は、すべて内容分析の例である。もっとも、研究論文において、「内容分析」という語は、量的、および質的内容分析を含む特定のアプローチを指す専門用語である (例えば、Altheide, 1996)。

例えば、多発性硬化症をもつ妊婦の心配事について尋ね、結果を整理することで心配事の一覧を作成した記述的研究 (Smeltzer, 1994) や、遺伝子検査に関する医師の受け止め方についての情報を、医師をフォーカスグループに分けて引き出し、その受け止め方をまとめた記述的研究 (Geller & Hotzman, 1995) では、心配は心配のままであり、受け止め方は受け止め方のままであった。それらは、ある理論におけるある出来事の状態にも結果にもなり得なかった。そして、ナラティブ表現におけるそれ自身の「方略的な」表現 (Riessman, 1990) にもならなかったのである。

データの再現

質的記述的研究に期待される成果は、データに最もふさわしい方法でまとめられたデータ情報の内容についての率直な要約の記述である。Smeltzer (1994) は、妊娠中の時期によって要約を整理し、多発性硬化症をもつ女性の妊娠に関する心配を、妊娠前、妊娠中、出産時、出産後に現われた通りに記述した。また、GellerとHoltzman (1995) は、(a) 調査内容の公開 (disclosure)、非指示性 (nondirectiveness)、機密性に対する責任の認知と、これらの認知におけるジェンダーと専門分野による差異、(b) 遺伝子検査をプライマリケア実践に組み入れることへの障害とインセンティブ (信頼、資金繰り、患者の要求を含む) の認知、および、この場合も同じく、これらの認知におけるジェンダーと専門分野による差異という、情報を引き出した主要なトピックを反映する2つの主要なカテゴリーの中に、その要約を分類した。また、データを整理する方法には、次のような別のやり方もある。①出来事が起こった時間の順に並べる、もしくは逆の順に並べる、②最も一般的なテーマから特殊なテーマの順に並べる、③ある出来事の大きな文脈を説明し、そこから個別のケースへと移っていくか、もしくは、逆に個別のケースから大きな文脈へと移っていくかを選ぶ段階的なフォーカシング、④実在の人 (人々) を、日、週、月、年の単位で追っていく手法、⑤同じ出来事を1人以上の研究参加者の視点から記述していく羅生門効果である (Sandelowski, 1998; Wolcott, 1994, pp.17-23)。

このような要約は、データのより突っ込んだ (「表面的な」とは逆の) 再現に容易に役立つであろう。しかし、この要約は、質的記述的研究にとって、方法的に「よい」のか、あるいは実践的に価値があるのか考慮する必要はない。

例えば、羅生門効果のアプローチは、同じ出来事について異なる研究参加者の見方を、研究者がさらに解釈していくことに役立つ。しかし質的記述的研究を行なう研究者は、これらの研究参加者の見方を包括的に、そして、正確に詳述しなければならない。したがってこのような要約は、第一には最終的な成果として価値があり、次に、さらに研究を進めていくための出発点として価値がある。

出来事の記述的要約が、収集されたデータを最もよく示し、読む人にとって最も意味があるように構成されているのであれば、その記述的要約以上のものを示す必要はない。しかしそのような要約は、それ自体が、今後のグラウンデッド・セオリーや現象学的研究のための作業概念、作業仮説、そしてテーマ的側面をもたらす、あるいは、それ自身の中にその萌芽があるのかもしれない。

■ 結論 ■

結論として、質的記述的研究は、現象の率直な記述が求められるときに選択すべき方法である。質的記述的研究は、とりわけ、出来事についての「誰が」、「何を」、「どこで」を知りたい研究者に有用である。すべての質的研究アプローチの基礎となるものではあるが、質的記述的研究は、それ自体が価値のある方法論的アプローチを形づくっている。研究者は自らの方法を何ら恥じることなく、質的記述と呼ぶことができよう。もしその研究方法のデザインに何か他の方法の含みが出ていれば、別のふさわしい名で呼んでみたり、他の方法で行なう代わりに、その含みについて詳しく述べればよい。

それで、質的記述はどうなったのか？ その方法は、まだまだ健在である。しかし、質的記述的研究は、質的研究を構成する、価値のある、他のものには代えがたい手法であることが再評価され、健康に関連する科学研究のためにも本来の姿へと戻る必要があろう。

文献

- Altheide, D.L. (1987). Ethnographic content analysis. *Qualitative Sociology*, 10, 65-77.
- Altheide, D.L. (1996). *Qualitative media analysis*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Artinian, B.A. (1988). Qualitative modes of inquiry. *Western Journal of Nursing Research*, 10, 138-149.
- Becker, H.S. (1996). The epistemology of qualitative research. In R. Jessor, A. Colby, & R.A. Shweder (Eds.), *Ethnography and human development: Context and meaning in social inquiry* (pp. 53-71). Chicago: University of Chicago Press.

- Charmaz, K. (1990). "Discovering" chronic illness: Using grounded theory. *Social Science & Medicine*, 30, 1161-1172.
- Chow, S. (1998). Specialty group differences over tonsillectomy: Pediatricians versus otolaryngologists. *Qualitative Health Research*, 8, 61-75.
- Emerson, R.M., Fretz, R.I., & Shaw, L.L. (1995). *Writing ethnographic fieldnotes*. Chicago: University of Chicago Press.
- Geller, G., & Holtzman, N.A. (1995). A qualitative assessment of primary care physicians' perceptions about the ethical and social implications of offering genetic testing. *Qualitative Health Research*, 5, 97-116.
- Giorgi, A. (1992). Description versus interpretation: Competing alternative strategies for qualitative research. *Journal of Phenomenological Psychology*, 23, 119-135.
- Jablonski, R.S. (1994). The experience of being mechanically ventilated. *Qualitative Health Research*, 4, 186-207.
- Kittell, L.A., Mansfield, P.K., & Voda, A.M. (1998). Keeping up appearances: The basic social process of the menopausal transition. *Qualitative Health Research*, 8, 618-633.
- Lincoln, Y.S., & Guba, E.G. (1985). *Naturalistic inquiry*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Lowenberg, J.S. (1993). Interpretive research methodology: Broadening the dialogue. *ANS: Advances in Nursing Science*, 16(2), 57-69.
- Maxwell, J.A. (1992). Understanding and validity in qualitative research. *Harvard Educational Review*, 62, 279-299.
- McMahon, M. (1996). Significant absences. *Qualitative Inquiry*, 2, 320-336.
- Miller, W.L., & Crabtree, B.F. (1992). Primary care research: A multimethod typology and qualitative road map. In B.F. Crabtree & W.L. Miller (Eds.), *Doing qualitative research* (pp. 3-28). Newbury Park, CA: Sage.
- Morgan, D.L. (1993). Qualitative content analysis: A guide to paths not taken. *Qualitative Health Research*, 3, 112-121.
- Patton, M.Q. (1990). *Qualitative evaluation and research methods* (2nd ed.). Newbury Park, CA: Sage.
- Pearce, J.C. (1971). *The crack in the cosmic egg: Challenging constructs of mind and reality*. New York: Washington Square Press.
- Poirier, S., & Ayres, L. (1997). Endings, secrets, and silences: Overreading in narrative inquiry. *Research in Nursing & Health*, 20, 551-557.
- Riessman, C.K. (1990). Strategic uses of narrative in the presentation of self and illness: A research note. *Social Science & Medicine*, 30, 1195-1200.
- Sandelowski, M. (1995). Sample size in qualitative research. *Research in Nursing & Health*, 18, 179-183.
- Sandelowski, M. (1998). Writing a good read: Strategies for re-presenting qualitative data. *Research in Nursing & Health*, 21, 375-382.
- Sandelowski, M., Holditch-Davis, D., & Harris, B.G. (1992). Using qualitative and quantitative methods: The transition to parenthood of infertile couples. In J.F. Gilgun, K. Daly, & G. Handel (Eds.), *Qualitative methods in family research* (pp. 301-322). Newbury Park, CA: Sage.
- Smeltzer, S.C. (1994). The concerns of pregnant women with multiple sclerosis. *Qualitative Health Research*, 4, 480-502.
- Strauss, A., & Corbin, J. (1998). *Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory* (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.

- Talbot, L.A. (1995). *Principles and practice of nursing research*. St. Louis, MO: Mosby-Year Book.
- Tashakkori, A., & Teddlie, C. (1998). *Mixed methodology: Combining qualitative and quantitative approaches*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Thorne, S. (1991). Methodological orthodoxy in qualitative nursing research: Analysis of the issues. *Qualitative Health Research*, 1, 178-179.
- Thorne, S., Kirkham, S.R., & MacDonald-Emes, J. (1997). Interpretive description: A noncategorical qualitative alternative for developing nursing knowledge. *Research in Nursing & Health*, 20, 169-177.
- Timmermans, S. (1997). High touch in high tech: The presence of relatives and friends during resuscitative efforts. *Scholarly Inquiry for Nursing Practice*, 11, 153-168.
- Trost, J.E. (1986). Statistically nonrepresentative stratified sampling: A sampling technique for qualitative studies. *Qualitative Sociology*, 9, 54-57.
- Van Manen, M. (1990). *Researching lived experience: Human science for an action sensitive pedagogy*. Albany, NY: State University of New York Press.
- Wertz, F.J. (1983). From everyday to psychological description: Analyzing the moments of a qualitative data analysis. *Journal of Phenomenological Psychology*, 14, 197-241.
- Willems, E.P. (1967). Toward an explicit rationale for naturalistic research methods. *Human Development*, 10, 138-154.
- Wolcott, H.F. (1992). Posturing in qualitative inquiry. In M.D. Le Compte, W.L. Millroy, & J. Preissle (Eds.), *The handbook of qualitative research in education* (pp. 3-52). New York: Academic Press.
- Wolcott, H.F. (1994). *Transforming qualitative data: Description, analysis, and interpretation*. Thousand Oaks, CA: Sage.

論文の解説

論文の冒頭でサンデロウスキー先生は、質的記述的研究が一般に「魅力的でない」と見なされるのは、研究デザインの序列の中で記述的手法が「最も粗雑な、洗練されていない研究法」と位置づけられていることに関係していると指摘しています。そして、そのマイナスの影響によって現象学的研究、グラウンデッド・セオリー法、エスノグラフィー、ナラティブ研究を「装っている」だけの研究が増加し、記述的領域だけでなく質的研究全体の質が低下することを危惧しています。こうした問題意識から、質的研究の方法が複雑さを増す今だからこそ、質的記述的研究の再評価が求められており、他の質的方法と同等の位置にある独自性もつ1つの方法として質的記述的方法の特徴をしっかりと理解することが必要だと述べています。

では、質的記述的研究の独自性とはどのようなものなのでしょうか。この論文の中でサンデロウスキー先生は、質的記述が量的な記述や他の質的方法とどのように異なるのかを説明し、次いで質的記述的研究デザインの典型的な特徴を詳述しています。

質的記述的研究とは、ある出来事について、そうした出来事が起きている日常の言葉で包括的に要約するものです。研究者があらかじめ設定した範囲を超え出ることのない量的記述に比べると、質的記述では研究参加者が出来事に与える意味について考える余地が研究者に広く与えられており、より解釈的である点が特徴です。しかし同時に、その解釈は他の質的方法、例えば現象学的記述やグラウンデッド・セオリーの記述と比べると推論の少ない解釈であり、他の研究者とコンセンサスが容易に得られるような解釈であることも特徴です。質的記述的研究を行なう研究者は、他の質的方法で研究をする者よりも、データのより近くにおいて、語られた言葉や出来事の表面から離れません。そのため、臨床現場や政策現場で生ずる現実的課題に、率直で、理論による変形が最小限の解答を与えるのに適しているとサンデロウスキー先生は説明しています。

興味深いのは、質的記述には方法論的に区別される2つのものがあるというサンデロウスキー先生の指摘です。つまり、ケースの事実を「日常の言葉で」表現する質的記述的研究の基本的・基礎的な質的記述と、出来事を「別の言葉で」表現する現象学、グラウンデッド・セオリー、エスノグラフィ、ナラティブ研究などにおける質的記述です。後者の記述では、それぞれの学問的背景で用いられる概念や言葉を用いて、自分なりに現象を解釈し表現することが求められます。言葉や情景を読むだけでなく、いろいろな角度からそこにあるものを読み取っていかなければならないので、研究者にはデータの中に深く入り込んだり、それを超えて考えることが求められます。この指摘は、質的記述的研究と他の質的アプローチとの違いを把握する上で重要です。

こうして他の類似する研究デザインとの比較から質的記述の独自性を明確にした後、サンデロウスキー先生は質的記述的研究の典型的な特徴について詳しく説明しています。まず理論的/哲学的志向については、質的記述的研究の研究者は既存の理論から最も自由であること、つまり一連の質的アプローチの中で最も「理論的でない」点が挙げられています。質的記述的研究では、特定の方法論的枠組みに基礎づけられることなく、自然主義的探究のパラダイムに基づき、あるものをその自然の状態の研究することが第一に目指されるのです。こうした意味では質的記述的研究は他の質的方法とは区別される際立った特徴を有すると言えますが、しかし、質的記述的研究の中には他の質的方法の色合いをもつ研究が存在することも、サンデロウスキー先生は急いで付け加えています。現象学的色合いを感じさせる質的記述的研究、エスノグラフィックな含みをもつ質的記述的研究などがその例です。

サンプリングの手法、データの収集と分析に続き、質的記述的研究におけるデータの再現について紹介されています。ここに示された「データを整理する方法」の具体例は、私たちが質的記述的研究の報告書をまとめる際に役立つことでしょう。質的記述的研究では最終的に、探究する出来事についての要約の率直な記述（研究参加者の見方を包括的に、正確に詳述すること）が求められます。そのような記述には、第一にその研究の最終的な成果としての価値がありますが、加えて、今後の研究の出発点となる潜在的価値をも

内在しているかもしれません。

サンデロウスキー先生が指摘するように、質的記述的研究は現象の率直な記述が求められるときに選択すべき方法であり、他の研究デザインには代えがたい基本的・基礎的な方法論的アプローチであると言えます。研究者は、消去法的に「〇〇法にも〇〇法にも当てはまらないから……」という理由で非選択的に選択される名なしの方法論としてではなく、独自性のある1つの方法論として質的記述的研究の特徴を正しく理解し、自分の研究目的に合うと感じられるときには積極的にこれを活用するべきでしょう。最も避けるべきことは、質的記述的研究に価値がない、科学的でないという不当なレッテルを貼り、実際には行っていない現象学的研究、グラウンデッド・セオリー、エスノグラフィー、ナラティブ研究などを行なったかのように「装う」ことです。そのような偽装をすることは、逆に、現象学的研究、グラウンデッド・セオリー、エスノグラフィー、ナラティブ研究などに対する研究者の無理解を露呈することになります。質的記述的研究にそれらの「含み」をもたせた場合には躊躇なくそのことを主張し、実際に行なったサンプリング手法やデータ収集、データ分析の過程をその理由とともに詳述することが、研究者には求められるでしょう。